

# マンハッタン先生で行く異世界旅行

シド・ブランドーMk—IV（地底の住人）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんか気が付いたら身に覚えのない砂浜の海岸に寝そべってた主人公。海の水を見るとあの有名な青い奴になっていた。この姿になった主人公はどんな生活を送るのか！

げんしライフ、スタート！

## 目次

気が付いたら全身真っ青の光ってるやつになっていた。	1
悪魔の実で言うところのアトアトの実の原子人間てどこ？	4
最強の船長と青い奴	7

気が付いたら全身真っ青の光ってるやつになっていた。  
た。

なんか気が付いたら身に覚えのない砂浜の海岸に寝そべってた。  
あー、異世界転生やら異世界召喚やらのテンプレだなーと思いが  
ら、テンプレのように鏡になった海の水で自分の姿を確認してみた。  
……あの青い有名な先生になった。うん。

「マンハッタン先生じゃあねえか！」

うん。思わず叫んじゃったわ。強すぎね？……え？ここアメコミ  
みたいなトップ層の世界じゃないよね？そんな世界だったら俺ちゃ  
ん萎えるよ？もうこの力使ってこの無人島で隠居生活するよ？……  
ごめん。無人島は適当。

……ていうか、感情無くなるのかないよね？俺ちゃん彼女できたこ  
とないんだよ？知らんけど。もうできる限り美味い飯作って感情少  
しでも残しとかないと。

残ったらしいなあ。と思ったけど今服着てなかった。もう毒され  
てるのかもしれない。マジで気を付けよう。

知らない人に能力、その他を説明しよう。

そもそもDr.マンハッタンはアメコミの二大巨頭、DCで198  
0年代に連載されていたウォッチメンに出てきた全身真っ青の光つ  
たおっさんだ。そうなった経緯を簡単に説明すると、彼は事故によつ  
て塵も残らぬレベルに原子分解された後に自力で復活したヤベー奴。  
体毛がなく全身ツルツルで服を着てない変質者。ちなみになん  
で光ってるのかと言うと、高速で原子の崩壊と維持が行われてるから  
らしい。

能力を説明する原子そのもの。この世界は全て原子で構成されて  
いる。それを全て操ることが出来る。原作では歩く原子爆弾なんて  
言われてた。

この能力を応用し、

- ・惑星間のテレポート
- ・巨大化・縮小化
- ・増殖
- ・原子を構築、分解し物を作ることが出来る。
- ・浮く。
- ・平行世界への干渉

その他色んなことができる。まあ後々確認してみるわ。ガラスの家作ってそれ飛ばして旅行した事あったらしい。知らんけど。

とりあえず増殖してみた。

「(何の用だオリジナル。)」

「オリジナルとか言うなよ。君は僕で僕は君なんだろう？」

なんだこのワード、初めて使ったわ。君の名はかよ。それより複雑だけど。なんかすげえめんどくさいことになりそうだな。

「(でも、今から1万、10万と数えられないくらい自分が増えていくんだぜ。オリジナルくらい決めとかないとほんとに感情無くなるぞ。……まあ、そう考えるとぶつちやけ感情無くなった方がいつその事良いかもしれんがね。)」

そう考えると頭痛くなってくるわ。……あ、向こうも頭いたそうにしてる。まあそうだよな。だって同一人物だもんな。

「なあ、この島で一生暮らしてもいいかなって思ってる。」

「好きにすれば良いと思う。僕は君で君は僕だ。別に不満もない。

まあ、この能力だから基本的に別行動しても全く問題ないがな。」

ドーン！

その時、この島に大きな音が鳴り響いた。

「なんの音だ？」

「(火山じゃないか?)」

「ああ、火山ね。じゃあ島の奥の方行ってみるか。」

「(行ってみよう。)」

ガアアん！ ギイイン！！

奥に徒歩で行ってみると、大きなおっさん2人（知ってるやつ）がそれぞれ武器と盾持って決闘してた。うん。知ってる世界だわ。

「知ってるわこの世界。」

「うん。知ってるなこの世界。」

「じゃあ、せーのと言おうぜ。」

「（いいぞ、）」

「せーの！」

「ワンピース！（ワンピース）」

こりゃあヌルゲーの予感ですわ。

悪魔の実で言うところのアトアトの実の原子人間てどこ？

とりあえずドリーとブロギーに話しかけてみることにした。

「なあ、あんたら巨人族って奴かい？」

「ああそうさ！エルバフの戦士、ドリーと」

「ブロギーだ！」

ああ、やつぱ正解だったな。知ってたけど。

それよりも

「やつぱあんたら貫禄あるなあ。すげえかっけえよ。感情なくしかけてたけどあんたら見て取り戻したね。」

「ガババババ！なんのことが分からんがそりやあ良かった！」

前々から思ってたけどすげえ笑い方だよなこの世界の人達。まあ個性あつて好きだけど。

「ゲギャギャギャギャ！……ところで、あんたらは双子かなんかか？」

まあそりやあ聞いてくるよね。だってまるつきり同じやつが目の前に2人も居るんだもの。聞いてこない方がおかしいよ。

「いや、僕達は2人で1人だ。」

「(僕はこいつだし、こいつは僕だ。)」

「悪魔の実の能力者か？」

「まあ、そんなところだよ。ドリー。」

「(ああ、そんなところだ。ブロギー。)」

「そんなところって言うことは違うのか」

まあ、能力は悪魔の実くらいしかないからな。

「海に入っても力が抜けなかったからね。実験に巻き込まれてこんな身体を手に入れたんだ。」

「す、すまん。そんな話をさせちまつて。」

「わ、悪かった。」

暗い顔をして謝ってくれたドリーとブロギー。うん。優しいね。優しくして強いとか惚れてまう。男だけど。あ、もちのろんでBL展開なんてないからね？そんな変な期待すんなよ？

「(いいよ。気にしないで。)」

「そこで僕はこの能力を悪魔の实の力つてことにしたんだ。」

「へえ、なんて名前だ？」

「(アトアトの实の原子人間。)」

……しつくりくるのがこれくらいしか無かった。

「アトアトの实？」

「そう。アトムのアト。アトムつて原子つて意味なんだ。」

「そもそも原子つてなんなんだ？」

2人とも分からないつて顔してるわ。まあ、そうだよな。何年もこんな島でずっと戦い続けてるんだもんな。知るわけねえな。

「(簡単に説明すると、この世の全ての物質の基礎となる物質。)」

「???どういうことだ？」

「すまん。言ってることが分からねえ。」

簡潔に言いすぎて逆に伝わらなかつたのかも。これは反省。

見てもらう方がいいかな。

「見てもらった方がわかりやすいから今からお披露目会するよ。」

「(なんかやつて欲しいこととかあるか?)」

「ある程度のことなら出来るはず。」

あ、これ逆に困った顔してる。……じゃあ助け舟を出してみよう。

「困った顔してるね。じゃあなんでもいいなら今から軽く一通りやつてみるね。」

「ああ、よろしく頼む。」

「(見てるんだぞ。)」

そつからお披露目会が1時間から2時間くらいおこなわれた。炎を出したり雷出したり自然現象をおおかた出した、他には家を建てて飛んだり乗り物を作ったり料理を振舞ったりした。分裂も数えられないくらい作った。最後に2人のサイズになってお披露目会は終了した。ぶつちやけソレじゃあほとんど見せれなかつたけど。

「ここまでくると何も言えねえよ。」

「今まで見たどんな能力者よりも凄かった。」

2人がドン引きしてから1週間以上経つたある日。2人とすごい仲良くなった僕はいきなりだが別れの挨拶をした。



「2人とも済まない。この島を出ようと思っっている。僕は色んなところに行ってみたいんだ。」

「ガババババ！俺たちにとめる権利はない！」

「ゲギャギャギャギャ！その通りだ！この世界の色んなことを見てくるといい！」

良かった。2人とも笑顔でお見送りしてくれるようだ。

「ありがとう。最後は必ず冒険譚を語りはこの島に戻ってくるよ。」

「おう！期待して待ってるぜ！ガババババ！」

「語れないくらい思い出作ってこいよ！ゲギャギャギャギャ！」

「ああ、もちろんだ。行ってくるよ。」

「行ってこい！」

2人の元気な別れの挨拶を聞いて、作った家で空を飛びながらこの島を離れた。

## 最強の船長と青い奴

とりあえず今がどの時期なのかを探らなければ……お、ちょうどいいタイミングでニュースクーが飛んできた。

「ニュースクーよ、その新聞1部くれないか。」

最初は「こんな奇妙なやつ今まで見た事ないぞ、なんだコイツは」みたいな顔で見てきたが

「うむ…チップを渡そう。これでお前を世話しているやつに好物でも買ってもらえ。あと、カモメの好物はイワシと聞いたことがある。それもあげよう」

こういうと「クー」と嬉しそうに鳴いて新聞を1部渡してきた。

「ありがとう」

さてさてさて、今日の見出しはなんだろうなあつと。

『悲報 ロックス海賊団 結成』

…おつとくマジかあ。えらい時代に来ちまったもんだなあ。

「これはまずいな。能力がいくら最強とはいえ、まだ覇気は使えないんだ。出会った途端殺すとか言われたら洒落にならんぞ。俺たち死なないが。」

「まあ、そこは工夫しだいな。アダマンチウムやヴィブラニウムを生成してアーマーにしたりな。もしかしたら現物を見てないから再現が出来ないかもしれないが。」

「(それもそうだな。)」

「…!?ジハハハハ！おい見てみるよ船長！家が空飛んでるぞ！」

フラグ回収早すぎね？これ確実にシキの声じゃねえか。

「はあ？お前がフワフワの能力で浮かしたただけだろ？そんなしようもねえことδειいち俺を呼ぶな！嘘つくならもうちよいマシな嘘をつけ！」

船長ってことはこの声がロックスか？

「ちげえんだって！ほら見てみるよ！俺が動かそうとしても動かねえんだよ!!」

「…ああ？…確かにその中にはなんか居るな。気配は2つあるが全く同じ。なんの能力者だ？」

まあ…これは出るしかないか。

「…人の家になんのようにだ？」

「てめえか！俺の真似事みてえなことしてる奴は!!何の能力者だ？」

「(教えても良いが教養無いやつだと理解するのに結構苦勞するぞ。実際俺もかなり苦勞したしな。)」

「うわっ！同じやつがまた出てきた！ほんとにどういう能力者だよ…。」

シキのやつびっくりしてるwww

タイミングバツチリだな。

「全身真っ青とはな…。いっちょ俺と闘ってみねえか？」

「そう言うと思った。だが、その提案にはのれないな。」

「何故だ!?俺がこんなに頼み込んでんのに!!」

「いや船長あんた頭すら下げてねえじゃねえか。…だが、今世界を騒がせているやつ提案を断るのはかなりリスクだろ。ちゃんと理由はあるのか？」

「(ああ、ある。…そもそも試合にならない。俺はまだ覇気が使えないからな。俺の能力があんたに効かなかった場合、俺はあんたを倒せない。い。)」

「だが、かと言って俺も能力の影響で死ぬ事は無い。」

「(死んでも生き返る。だからあんたも俺を倒せない。)」

「交互に喋んな気持ちわりい!!」

「あつはつはつはつは！面白いなお前!!だが、お前は能力者だ。お前を海につき落とせば能力関係なしにお陀仏だろ。」

「海に入ってもなんの影響もなかった。多分、これもこの能力の影響。」

「はあ？悪魔の実際の能力者が海に沈まないってどういうことだ？ほんとに何の能力者だ。ますます分かんねえな。」

「(海で溺れないとか悪魔の実際のルールに反しているが俺はこう名付けた。ログア系悪魔の『アトアトの実際のアトム人間』)」

「アトムウ？何だそりゃあ？」

そりゃあシキは分かんねえわな。

「ロックスは分かるか？」

「聞いたことあるような、ないようになって感じだな。…アトムってのは何なんだ？」

「(アトムとは原子のことだ。)」

「そして原子とは『この世の全ての物質の基礎となる物質』なんだ。例えば、炎、雷、水、土、木、空気、人、動物、この世界に存在するありとあらゆるものがこの原子でできている。」

「(それを操作したりできるのが俺の能力だ。)」

「だから、俺を完全消滅させても空気どころかお前たちが存在していたらそこから復活する。シキ、試しに俺を切ってみろ。覇気を纏わせても問題ない。」

「じゃあ遠慮なく切らしてもらおうぜ。死んで後悔すんなよ!!」

次の瞬間、俺の身体は真っ二つになった。

「流星は金獅子のシキ。」

「(剣術凄いな。見えなかったぞ。)」

「だから交互に喋んなって!!…ていうかマジで死なねえんだな。覇気たっぷり込めて殺すつもりでやったのによ。癪に障るぜ。」

「…でどうやって再生するんだ？」

「いい質問だな。ロックス。再生方法は2つある。」

「(このまま上半身と下半身をくつつける方法か、そのまま分裂するかだ。)」

「こんなふうにな。」

「へだから言っただろ。俺は死ぬことは無いと。く」

「増えた!？」

「…ますますおもしれえ奴だな。俺の船に乗れよ!」

「だから俺は海賊どころか賞金首ですらないんだって」

「へだから、お前たちの船に乗る意味が無い。く」

「(政府に加盟しているって訳でもないがな)」

「まあもし賞金首になったらその時は考えてやるよ…それか、俺に覇

気を教えてくれ。それが条件だ。」

「ニヤ）：良いだろう。教えてやる」

かくして俺は『ロックス海賊団』に入ることになった。